

Title	マラルメによるポー翻訳(2)
Sub Title	La traduction de Poe par Mallarmé (2)
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.58 (2014. 3) ,p.43- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Hashimoto Junichi = 橋本順一教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20140331-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20140331-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## マラルメによるポー翻訳 (2)

原 山 重 信

### ボードレールとマラルメのポー韻文詩の翻訳を比較する

今回は、私が自らに課した課題のうち「②ボードレールの翻訳のある4篇の詩については、ボードレール訳と比べる<sup>1)</sup>」の一部を実行に移したい。前稿に記した通りであるが、ボードレールが訳した韻文詩は、「我が母に」(À ma mère)、「勝ち誇る蛆」(Le Ver Conquérant)、「憑りつかれた宮殿」(Le Palais Hanté)、それに「大鴉」(Le Corbeau)の4編のみであった。ポーの韻文詩をフランス語に移すのは不可能と断じて、これに手を染めなかったボードレールではあったが、この4編だけは、自らの訳業の文脈から、恐らく *malgré moi* ではあったのだろうが、訳出しないわけにはいかなかった。そこから、マラルメの翻訳する態度との違いを読み取ることができる。今回は4編のうち、「大鴉」を除く3編を取り上げる。「大鴉」は長編であるに加えて、マラルメが少年時代に手がけた翻訳が『落穂集 *Glans*』に載っているので、これも比較の対象にせざるを得ず、煩雑さを極めるため、後に単独で扱いたい。

まず、①原文、②1～6種類の邦訳、③ボードレール仏訳、④マラルメ仏訳の順番にテキストを掲げよう。

「憑りつかれた宮殿」 (Le Palais Hanté)

① THE HAUNTED PALACE

In the greenest of our valleys  
 By good angels tenanted,  
 Once a fair and stately palace —  
 Radiant palace — reared its head.  
 In the monarch Thought's dominion —  
 It stood there!  
 Never seraph spread a pinion  
 Over fabric half so fair!

Banners yellow, glorious, golden,  
 On its roof did float and flow,  
 (This — all this — was in the olden  
 Time long ago,)  
 And every gentle air that dallied,  
 In that sweet day,  
 Along the ramparts plumed and pallid,  
 A wingéd odour went away.

Wanderers in that happy valley,  
 Through two luminous windows, saw  
 Spirits moving musically,  
 To a lute's well-tuned law,  
 Round about a throne where, sitting  
 (Porphyrogene!)  
 In state his glory well befitting,

The ruler of the realm was seen.

And all with pearl and ruby glowing  
 Was the fair palace door,  
 Through which came flowing, flowing, flowing,  
 And sparkling evermore,  
 A troop of Echoes, whose sweet duty  
 Was but to sing,  
 In voices of surpassing beauty,  
 The wit and wisdom of their king.

But evil things, in robes of sorrow,  
 Assailed the monarch's high estate.  
 (Ah, let us mourn! — for never morrow  
 Shall dawn upon him desolate!)

And round about his home the glory  
 That blushed and bloomed,  
 Is but a dim-remembered story  
 Of the old time entombed.

And travellers, now, within that valley,  
 Through the red-litten windows see  
 Vast forms, that move fantastically  
 To a discordant melody,  
 While, like a ghastly rapid river,  
 Through the pale door  
 A hideous throng rush out forever  
 And laugh — but smile no more.<sup>2)</sup>

② 1. 加島祥造訳<sup>3)</sup>

狂える城

ほくらの谷のうちでとくに緑の濃い森の  
 善き天使たちの住むあたりに  
 かつて美しく立派な城があった——  
 輝かしい城が高く頭をあげていた  
 その領地は「思想」が支配していて  
 どんな天使もこれほど  
 美しい城の上を  
 舞ったことはなかった！

屋根には黄色の旗がいくつも  
 栄光を語って金色にはためき、流れて——  
 (これはみんなもう、——みんなもう——  
 ずっと昔のことだ)  
 その安らいだ日々には  
 羽根飾りをした薄黄色の城壁のあたりを  
 そよ風がたわむれ  
 翼ある香りとなって吹きすぎた。

この幸福の谷をさまよう人たちは  
 ふたつの明るい窓のむこうに、  
 数々の知<sup>ネボリワ</sup>と心がりズムよく動くのを見たものだ。  
 それらはよく調ったリュートの音に合わせて  
 王座をめぐって回っていて  
 王座にはこの領士の王者ポーフィロジーンが、  
 その威厳にふさわしく  
 栄光に輝いて座っていた。

そしてこの美しい城の入口は  
 真珠と紅玉の光る扉であり  
 そこからは「木魂<sup>こたま</sup>」となって  
 水のようにきらめいて流れてくる——  
 たえず流れてくる妙なる声——それは  
 すべてみなこの城の王者の

2. 入沢康夫訳<sup>4)</sup>

幽霊宮殿

善い天使たちが住みかにしていた  
 この国の谷間、そのわけても緑濃いあたりに、  
 かつては 美しくも厳かな王宮が——  
 ひかり輝く王宮が、高々とそびえ立っていた。  
 「思考」と名のる王者の領土、  
 そこにこの宮は立っていた。その美しさは  
 至高の天使が この半ばの美しさを持つ建物の上にも  
 翼をひろげたことが ないほどだった。

黄色な旗 輝く旗 金色の旗が 幾度も  
 屋上にたなびき また ひるがえり、  
 (これも——これもみな——はるかに遠い  
 昔のことになってしまったが)  
 その楽しかった昔には  
 羽根飾りの揺れる青白い城壁に沿って  
 そよかぜは のどかにたわむれ  
 かくわしい翼に乗って舞い去るのだった。

かつて この幸せの谷をさまよう者は  
 光あふれる二つの窓から眺めたものだ、  
 調べ正しい琵琶にあわせて  
 玉座をめぐり 調子よく舞う妖精たちを。  
 栄光にふさわしい威厳に満ちて  
 その玉座についているのは  
 生れながらの王者ポーフィロジーン  
 一国の君たる威容はまぎまぎと見てとれた。

真珠とルビーとで 美しい王宮の扉は  
 いちめんに輝きわたり、  
 その扉から とめどなく 溢れ 溢れ 溢れ出では  
 果しもなくきらめきつづけた  
 こだまの群れ。彼らのつとめ それはただ  
 王の才気と智慧のほまれを

智慧と悟りを、たぐいなく美しく  
ほめ讃えるのだった。

だが、悲哀の衣装を着た凶事の数々が、  
この王者の領土に襲いかかった！  
(ああ、傷ましいことだ！——もはや衰えた領主には  
明日の日はこないのだ！)  
そして城をめぐるように花ひらいた  
栄華の光は  
もはやただ、墓に埋められた物語——  
おぼろな思い出話となっている。

いまあの谷へくる旅人たちは  
血走った二つの窓を通してなにを見るか——  
そこには狂ったメロディーに乗って  
奇怪に動くものの群がいるのだ、  
そして色褪せた扉からは  
無気味な奔流のように、  
たえず甲高い叫びが吐きだされる  
それは笑いだ——だが微笑は絶えて、もはやない——

くらべるものもなくきれいな声で  
眼い上げること それだけだった。

だが 凶悪な者どもは 悲しみの衣を身にまとして  
君主の高御座を侵してしまった。  
(ああ 共に歌こう！ ——いたましいこの王の上に  
朝の光はまたと訪れまい)  
王の宮居のあたりをめぐる  
照りはなやいだ栄光も  
今は ただ かえらぬ昔の  
はかない思い出話となってしまった。

こうして 今 その谷間を行く旅人が  
赤い灯のともる窓から かいま見るのは  
調子はずれのメロディののって  
気まぐれな踊りをおどる 漠とした物怪の影。  
また 青ざめた扉からは  
ものすさまじい急流のように  
いまわしいものの群れが とめどなく駆け出して来て  
声高く啜うばかり——そのかみの微笑は二度と見られぬ。

3. 河野一郎訳<sup>5)</sup>

## 魔の宮殿

1

緑濃い霧のあわい

よき天使らの住まえるところに

そのむかし麗わしい宮殿が——

まばゆい宮殿が、そびえていた。

「こころ」なる王の領土に

宮殿は立っていた！

最高天使もいまだこれほど美しい宮居に

翼をひろげたことはなかった。

2

(すべて——すべては遠い

はるかなそのかみのできごと)

黄にこがね色にさんぜんと

旗は楼上にひるがえり

そのよき日

羽根飾りなびく真白い磐にそって

たわむれる微風は

かくわしい匂いを運んだ。

3

このしあわせの谿間にさまよう者は

二つの輝く窓から見た——

いと妙なる琵琶の調べに合わせ

玉座のまわりに妖精たちの踊り舞うのを。

玉座には

(いとも貴き天子！)

この領土の支配者が坐っていた

その誉れにふさわしい威厳をもって。

4. 阿部保訳<sup>6)</sup>

## 幽鬼の宮

優しい天使の住んでいる

この谷間の緑のこの上もなく濃いあたり

むかし美しく厳かな宮殿が

燦然たる宮殿が——聳えていた。

王者たる思想の領土に

それは立っていた。——

至上天使さえこの半分も美しい

大層の上を翔んだことはない。

黄色い、美事な、黄金の旗が

その屋根の上に漂い流れていた。

(これは——すべてみな——随分

昔のことであった)

そしてあの楽しい時分

微風は載れて、

羽を飾った蒼白い翼つたいに

芳しい風となり吹きすぎた。

幸の谷間の旅人は

二つの明るい窓ごしに、

王座のまわりに魂が、

糸竹の妙なる調べに合せ

調子よく、動いているのが見えた。

その王座には(王者が)坐り、

その榮華にもふさわしく揚々と、

その国の支配者が見えた。

4

して美しい宮殿の扉は  
 すべて輝く真珠と紅玉に飾られ  
 その扉より流れ流れて  
 とことわにきらめきながら  
 流れ出るのはこだまのむれ——  
 たぐいまれな美しい調べをもって  
 王の智を才を  
 歌うつとめをその身に担い。

美しい宮殿の扉には一面に  
 真珠や紅玉が煌いていた。  
 その戸から、木霊の群が  
 絶えず、そろそろ流れでて  
 閃いて、その楽しいつとめは  
 勝れて妙な声あげて、  
 彼等の王の才智と知恵を  
 歌うことばかり。

5

だが悲しみの衣をまとった魔性の姿は  
 けだかい王の領土に襲いかかった。  
 (ああ、あわれ、明日という日は  
 もはや王の上に明けることはない！)  
 かつて王の殿居のあったあたりに  
 輝き映えた栄光も  
 今はただ埋れた昔日の  
 おぼろな物語にすぎない。

しかし凶事は、愁の衣をつけ  
 君主のたいい地位を襲えば、  
 (あわれ、悼ましいかな——これよりは  
 魔王の明日の日を見ることはなからう。)  
 そして王の館のほとり、  
 栄えた栄華の夢は  
 ただすぎた昔の、  
 ほのかな物語りにすぎない。

6

いまこの谿を行く旅人たちは  
 赤く輝く窓ごしに見るのだ——  
 狂い乱れた楽の調べに合わせ  
 大いなる物影のあやしく動きまわるさまを。  
 して色青ざめた扉からは  
 おそろしい奔流のごとく  
 物の怪の群が走り出て  
 高笑いをひびかせる——だがそのかみの微笑みは消え果てて今はない。

いま、その谷間を通る旅人は  
 紅燈の窓ごしに、  
 調べされ乱れられて気まぐれに  
 うごめく魔の姿が見える。  
 ものすごい急流のよう  
 いろ蒼ざめた戸を通り  
 恐ろしい群集は永遠に走りでて、  
 あざ笑うが——もはや微笑むことはない。



5. 八木敏雄訳<sup>7)</sup>

## I

緑したたる山あいには  
よき天使らの住みなせる  
いにしへの、愛しけし、いかめし、管——  
輝きの宮——頭をあぐる。  
王なる「思考」の治むる宮ぞ——  
そこに聳えし。  
熾天使とてかく美わしき宮の上を  
翔けしことなし。

## II

旗たちは黄なり、燦爛、黄金の色  
屋上に棚引き、流る。  
(こは——こは、なべて、いにしへの  
その昔のこと)  
そよ吹く風のそよ吹けば、  
その愛しき日に、  
黄によそわれし城壁は  
気高き香こそ走りゆく。

## III

翠う山あいさまよえば  
双なる光の窓のうち  
天使らぞ見ゆ、小琴の  
ととの法の楽にぞ乗りて  
玉座をめぐるを。玉座には  
董色の御子！  
いかめしき衣いと神さびて  
国の王とぞ見ゆるなれ。

## IV

真珠、紅玉ちりばめし、  
愛しけし、宮の戸口より  
溢れるよ、溢れるよ、溢れ出すよ、  
とことわの光あふれて、

6. 西崎憲訳<sup>8)</sup>

## I

谷のなかでも、ひときわ緑濃き谷  
良き天使の住まえるところ  
かつて美しく荘厳な宮殿があった——  
輝ける宮殿——直と頭を立て  
思案という名の王の統べる地に  
宮殿は休息らう  
天崖に行く熾天使が見た一等美しい宮殿も  
この宮殿の半分ほど美しくはない

## II

旗の群は金色に、燦然と、黄金の色  
屋根の上で、翻き、翻る  
(これは——このすべては——  
香か遠き世のこと)  
そして並べての微風は載れ  
その甘美なる一日  
羽根で飾られた淡い色の墨壁に沿って  
翼を持った薫りが、翔ってゆく

## III

幸福なその谷を彷徨える者は  
ふたつの明るい窓の内を覗きこむ  
精霊たちが楽の音に添って踊っている  
巧みに奏でられる提琴  
みな玉座の周囲を回る。そこにましますは  
王になるべく生まれたお方  
堂々と、栄光を身に添わせ  
この王国を統べるお方

## IV

輝く真珠と紅玉に覆われて  
宮殿の扉はかくも美しく  
開かれたその扉から、這るがごとく、流れるがごとく  
訪える木霊たちの群

一群の木霊たちは、その勤め  
ひたすりに、こよなく閉ら、  
声美しく歌うなり、  
王の智と王の慧とを。

V

しかあれど、邪悪なる者、悲しみの衣身につけて  
襲いたり、王の高御座。  
(ああ悲しみ深し——とこしえに  
王の且は明くるまじ、すさびたり)  
この宮めぐりて花咲ける  
昔の光いまはく  
去にしその昔思うとも  
霞にのみぞ思はるれ。

VI

いま山あいに行く者は  
赤く染みたる窓のうち  
異形なるもの、おどろしく  
けたたましき音に躍るを見む。  
おぞましき早瀬の如く  
色褪せし戸口より  
忌まわしの群れとどめなく走り出では  
声高に笑えども——微笑みの絶えてなし。

光の飛沫を零しながら、口に歌を上せる  
かの者らの愉しき務めは歌うことのみ  
美の極みの声もて  
王の機知と叡智を讃える

V

されど、忌まわしきもの、悲哀の衣を纏い  
王の高貴な地を襲う  
(ああ、我らをして嘆かわしめよ、あのお方には  
もう朝はやってこない。なんたる侘びしさ)  
そして、宮殿を取り巻いていた、かの栄光  
赤く色づき、花卉を広げた栄光は  
記憶のなかの麗な物語となった  
遠き世に葬られた物語となった

VI

いま谷を旅する者は  
赤い緋の点る窓を覗きこむ  
調子外れの旋律の下、そこに群れるは  
幻のごとく揺蕩うは、大き影  
ああ、胸を凍らせる急流さながらに  
開け放した色のない扉から  
気味の悪い者どもが、果てることなく飛びだしていく  
時々と叫ぶ声——だが、そこに笑みはない

③ボードレール訳<sup>9)</sup>

## I

Dans la plus verte de nos vallées,  
 Par les bons anges habitée,  
 Autrefois un beau et majestueux palais,  
 – Un rayonnant palais, – dressait son front.  
 C'était dans le domaine du monarque Pensée,  
 C'était là qu'il s'élevait :  
 Jamais Séraphin ne déploya son aile  
 Sur un édifice à moitié aussi beau.

## II

Des bannières blondes, superbes, dorées,  
 À son dôme flottaient et onduaient ;  
 (C'était, – tout cela, c'était dans le vieux,  
 Dans le très-vieux temps.)  
 Et, à chaque douce brise qui se jouait  
 Dans ces suaves journées,  
 Le long des remparts chevelus et pâles,  
 S'échappait un parfum ailé.

## III

Les voyageurs, dans cette heureuse vallée,  
 À travers deux fenêtres lumineuses, voyaient  
 Des esprits qui se mouvaient harmonieusement  
 Au commandement d'un luth bien accordé,  
 Tout autour d'un trône, où, siégeant  
 – Un vrai Porphyrogénète, celui-là ! –  
 Dans un appareil digne de sa gloire,  
 Apparaissait le maître du royaume.

④マラルメ訳<sup>10)</sup>(改行は原典のまま。//は余白を示す。マラルメのテキストにおける余白の重要性に鑑み、マラルメの引用には、この記号を用いることとする)

## Le Palais Hanté

Dans la plus verte de nos vallées par de bons anges  
occupée, jadis un beau palais majestueux, rayonnant  
 palais ! dressait le front. – Dans les domaines  
 du monarque Pensée – c'était là son site : jamais  
 séraphin ne déploya de plumes sur une construction à  
 moitié aussi belle.  
 //  
 //  
 //

Les bannières, claires, glorieuses, d'or, sur son toit,  
 se versaient et flottaient (ceci – tout ceci – dans  
 un vieux temps d'autrefois) ; à tout vent aimable qui  
 badinait dans la douce journée le long des remparts  
empanachés et blanchissants : ailée, une odeur s'en  
 venait.  
 //  
 //  
 //

Les étrangers à cette heureuse vallée, à travers deux  
 fenêtres lumineuses, regardaient des esprits musicalement  
 se mouvoir, aux lois d'un luth bien accordé,  
 tout autour d'un trône : où siégeant (Porphyrogénète!)  
dans un appareil à sa gloire adapté, le maître du royaume  
se voyait.  
 //  
 //  
 //

## IV

Et tout étincelante de nacre et de rubis  
 Était la porte du beau palais,  
 Par laquelle coulait à flots, à flots, à flots,  
 Et pétillait incesamment  
 Une troupe d'Échos dont l'agréable fonction  
 Était simplement de chanter,  
 Avec des accents d'une exquise beauté,  
 L'esprit et la sagesse de leur roi.

## V

Mais des êtres de malheur, en robes de deuil,  
 Ont assailli la haute autorité du monarque.  
 – Ah ! pleurons ! car jamais l'aube d'un monarque.  
 Ne brillera sur lui, le désolé ! –  
 Et, tout autour de sa demeure, la gloire  
 Qui s'empourprait et florissait  
 N'est plus qu'une histoire, souvenir ténébreux  
 Des vieux âges défunts.

## VI

Et maintenant les voyageurs, dans cette vallée,  
 À travers les fenêtres rougeâtres, voient  
 De vastes formes qui se meuvent fantastiquement  
 Aux sons d'une musique discordante ;  
 Pendant que, comme une rivière rapide et lugubre,  
 À travers la porte pâle,  
 Une hideuse multitude se rue éternellement,  
 Qui va éclatant de rire, – ne pouvant plus sourire.

Et tout de perles et de rubis éclatante était la porte  
 du beau palais, à travers laquelle venait par flots, par  
 flots, par flots et étincelant toujours, une troupe  
 d'Échos, dont le doux devoir n'était que de chanter,  
 avec des voix d'une beauté insurpassable, l'esprit et  
 la sagesse de leur roi.

//

//

//

Mais des êtres de malheur aux robes chagrines assail-  
 lèrent la haute condition du monarque (ah ! notre  
deuil : car jamais lendemain ne fera luire d'aube sur  
 ce désolé!) et, tout autour de sa maison, la gloire  
 qui l'empourprait et fleurissait n'est qu'une histoire  
obscurément rappelée des vieux temps ensevelis.

//

//

//

Et, les voyageurs, maintenant, dans la vallée, voient  
 par les rougeâtres fenêtres de vastes formes qui  
s'agitent, fantastiquement, sur une mélodie discor-  
 dante, tandis qu'à travers la porte pâle, une hideuse  
 foule se rue à tout jamais, qui rit — mais ne sourit  
plus.

太字の下線部がボードレール訳ととりわけ大きく異なるマラルメ独自の訳と考えられる箇所である。二重下線部分は、マラルメが、恐らくはボードレールの既訳を参照し、これを踏襲したのではないかと疑われる箇所である。(以下の2編の詩についても同様の記号を用いる。)

これらから浮かび上がってくることは、マラルメは自らの発言に忠実に、なるべく直訳を守るという態度を示していることである。例えば、第2連の後半、

And every gentle air that dallied,  
     In that sweet day,  
 Along the ramparts plumed and pallid,  
     A wingéd odour went away.

の訳を比べてみよう。

(ボードレール訳)

Et, à chaque douce brise qui se jouait  
     Dans ces suaves journées,  
 Le long des remparts chevelus et pâles,  
     S'échappait un parfum ailé.

(マラルメ訳)

et, tout vent aimable qui  
     badinait dans la douce journée le long des remparts  
 empanachés et blanchissants : ailée, une odeur s'en  
     venait.

ボードレールは、à chaque douce brise と、冒頭に前置詞 à を補い、「それぞれの甘美なその風に」として、un parfum ailé (翼をもった香り) を最後に持って来て、これを主語とする倒置構文にしているのに対し、マラルメは、tout vent aimable (優しい全ての風) に関係代名詞節をつなげて、ここを名詞構文でまとめ、述語動詞がない。これを deux-points を介して、同格的に主語 une odeur (香り) と結んでいる。この二者では構文の解釈が全く異なるのだが、マラルメのほうが英語原文に忠実で、曖昧さを温存した形になっていると言えよう。

だが、必ずしもそうはなっていない箇所も散見され、これこそ、マラルメの独自性とも言えるのである。

1. 第5連、let us mourn! をマラルメは notre deuil と名詞化して訳している

が、これもマラルメの得意な名詞文の一つである。因みにボードレーは、pleurons! と直訳しているのである。

2. 最後の第6連、like a ghastly rapid river を殆ど訳出していない。

次のプレオリジナルとの比較検討に移ろう。

異同は以下の通りである<sup>11)</sup>。波線部分が決定稿と異なる部分である（以下同様）。

第1連

palais! levait la tête (*manuscrit avant correction, La Républiques des Lettres, 3 septembre, 1876* (以下 *RL* と略記))

第2連

d'autrefois) ; et, chaque vent (*RL*), d'autrefois) ; et, tout vent (*maquette, Deman* 版 (1888))

第3連

apparat à sa gloire (*RL, maquette*)

第4連

perle (*RL, maquette, Deman* 版)

第5連

qui s'empourprait (*maquette, Deman* 版)

とりわけ、第3連のヴァリエントは重要であろう。当初はこのように普通の語順になっていたのを、わざわざ à sa gloire apparat と語順を逆転させているのである。この種の、韻文を模した語順の逆転はマラルメの後期の散文に頻出する書き方であり、これがこうしたポー翻訳の実践の中で培われた

手法であることが裏付けられるからである。これが根拠なしとしないのは、他の作家の場合、こうしたことが行なわれないことから納得される。

このように、マラルメは先輩ボードレールの訳を巧みに取り入れつつ、これをさらに洗練させながら、自らの訳を構築していった姿が見て取れるのである。

この分析を、さらにマラルメの自作の詩との関連で見るとすれば、所謂「白鳥のソネ」の *un cygne d'autrefois* という詩句を想起しないわけにはいかない。

「勝ち誇る蛆」(Le Ver Vainqueur)

① The Conqueror Worm

Lo! 'tis a gala night  
 Within the lonesome latter years!  
 An angel throng, bewinged, bedight  
 In veils, and drowned in tears,  
 Sit in a theatre, to see  
 A play of hopes and fears,  
 While the orchestra breathes fitfully  
 The music of the spheres.  
 Mimes, in the form of God on high,  
 Mutter and mumble low,  
 And hither and thither fly —  
 Mere puppets they, who come and go  
 At bidding of vast formless things  
 That shift the scenery to and fro,  
 Flapping from out their  
 Condor wings Invisible Woe!

That motley drama! — oh, be sure  
     It shall not be forgot!  
 With its Phantom chased forever more,  
     By a crowd that seize it not,  
 Through a circle that ever returneth in  
     To the self-same spot,  
 And much of Madness and more of Sin  
     And Horror the soul of the plot.  
 But see, amid the mimic rout,  
     A crawling shape intrude!  
 A blood-red thing that writhes from out  
     The scenic solitude!  
 It writhes! — it writhes! — with mortal pangs  
     The mimes become its food,  
 And the seraphs sob at vermin fangs  
     In human gore imbued.  
 Out — out are the lights — out all!  
     And over each quivering form,  
 The curtain, a funeral pall,  
     Comes down with the rush of a storm,  
 And the angels, all pallid and wan,  
     Uprising, unveiling, affirm  
 That the play is the tragedy, “Man,”  
     And its hero the Conqueror Worm.



② 1. 阿部知二訳<sup>12)</sup>

見よ、ま寂しきこの歳月に  
 またとなき今宵の祝祭！  
 翼ある天使ら、被衣をまといて  
 ふかふかと泣けてうち集い、  
 憧れと怖れとにみてる狂言を  
 栈敷に入りて眺むれば、  
 時しも管弦、高く低く  
 奏ずるは、うるわしき天上の楽。

所作者ら、天つ神の装いまねて、  
 声ひくく、くぐもりつぶやき  
 おちこちに飛び交わせども、  
 漠として巨なる怪性(けいせい)のもの、  
 心のままに、かれらを操り  
 またここかしこ舞台をまわし  
 禿鷹(とら)さながらの翼ふるいて  
 見えざる悲愁の気をうち降す。

あな、乱(らん)がわし、この狂言、  
 されど心忘るる日あらめや！  
 玄妖(げんよう)の幻(まぼろし)を、とこしえに追い、  
 とこしえに捉ええぬともがら  
 満(み)なして、駆(か)けめぐりては  
 またも初めに、戻りくるのみ。  
 この狂言の、意(こころ)は何ぞ  
 狂乱か、いな罪劫か、はた恐怖か。

さあれ見よ、道化(みま)めく騒(さわ)ぎのものな、  
 はらばい忍(しの)び寄るものを！  
 寂寞(せきじやく)の遠景(えんけい)より  
 真紅(まにげ)の血(ち)に染みてのたうち出でて、  
 のたうち、のたうち、所作者(さくしや)らを啖(く)えば、  
 みな、こと切れぬ、断末魔(つぐも)の痛みに。

2. 入沢康夫訳<sup>13)</sup>

勝ち誇る蛆

見よ！ それは うらさびわたる  
 この末の世の とある祭の宵のできごと！  
 翼をもった天使の群れが ヴェールをつけて  
 さめざめと 涙しながら  
 希望と恐怖の芝居を観ようと  
 劇場の栈敷に 座を占めるとき、  
 オーケストラは 息たえだえに  
 天球の音楽を演奏する。

天なる神に 姿を似せた道化たちは  
 もごもごと 科白を吹いて、  
 あちら こちらと 跳びはねるのだが——  
 所詮(しよせん)ははかない操り人形、行ったり来たりを  
 意のままに操る 形も知れぬ巨大なもの共が  
 舞台の背景を 次から次へと変えながら  
 禿鷹(とら)そっくりの翼をばたつかせて  
 目に見えぬ「かなしみ」を撒き散らす！

ああ この道化芝居——それを  
 どうして忘れることができよう！  
 きまって同じ所へと 戻ってしまう円の上で  
 どうしてもつかまらぬ幻と  
 はてしもなくそれを追い求め走りつづける  
 一群(いっぐん)の者との いたちごっこ。  
 この芝居の 筋(すぢ)のかなめは おびたしい「狂気」と  
 いやまさる「罪」と「怖れ」。

だが、見るがよい、この乱脈(らんま)な道化(みま)のただ中に  
 這(わ)いずりながら 闖入(かんにゅう)するもの！  
 舞台(ぶたい)のひと気もないあたりから  
 のたうち出てくる血(ち)まみれのもの！  
 その のたうつこと！ のたうつこと！ ——断末魔(つぐも)の  
 悶(も)えと共に 道化(みま)たちはすべて餌食(えじき)となりはてる。

天使ら、すすり泣きしぬ、  
現身の血欄にぬれし毒牙を見しとき。

ことごとく、灯は消えぬ——消えぬ。  
さて、棺覆なせる緞帳、  
おののけるものみなの上に  
嵐掃つごとく疾くおくりければ、  
天使ら、みな蒼徳めはてて、  
被衣をぬぎ、立ち上がりつつ、  
認めぬ——こは悲劇「人間」なり、  
立役者こそ、征服者「虫」なり、と。

人の血にべっとり濡れた いまわしい虫の毒牙を  
まのあたりにして むせび泣く天使たち。

消えた——灯が消えた——すべて消えた！  
戦きふるえる みなの上に  
柩の布の緞帳が 嵐のようなすさまじい  
いきおいで 落ちかかると、  
ことごとく色蒼ざめた天使たちは  
立ち上り ヴェールをとってうなぎき合う、  
この芝居こそ「人間」という名の悲劇、  
主役は「勝ち誇る蛆」なのだ と。

3. 阿部保訳<sup>14)</sup>

勝利のうじ虫

あわれ——うら<sup>ま</sup>淋しい末の世の

祭礼の夜のこと、

翼のある天使の一群は、

覆面をつけ、涙にくれて、

希望と恐怖の一幕を

見ようと戯場に坐っていたが、

そのとき管<sup>パイプ</sup>絃<sup>ストリングス</sup>楽は、天上の

妙音を奏でるさまもとぎれとぎれや

道化役者は、天上の神の姿して

眩<sup>くら</sup>いたり、声ひくく口ごもり

あちらこちらと飛びまわる——

彼等は操<sup>まもつ</sup>り人形に過ぎないので

巨大な見えないものの指図のままに歩き廻るばかり、

巨人は兀鷹<sup>うづたか</sup>のような翼を羽ばたいて

目に見えない悲哀をはなち

その書割をあちらこちらと置換える。

道化芝居よ、——ああ、それは

決して忘れられない。

群集はその幻を永遠に追うてはいるが

捕えることはできない、

つねに同処に

戻ってくる円のうち

影<sup>かげ</sup>しい乱心や、それにもまして罪悪や、

畏怖こそは重要な筋である。

しかし見よ、騒がしい芝居のなかに

這<sup>は</sup>らばうものが闖<sup>ちやう</sup>入する。

しんとした舞台から

悶<sup>も</sup>でる、血塗れのものよ。

それは悶えて、のたうちまわる。——臨終の悲鳴をあげて

道化役者は餌となる。

4. 八木敏雄訳<sup>15)</sup>

見よ！ 祭りの夜ぞ、

さみしき末の世の。

天使の群れは翼をそろえ、着飾って、

ヴェールをかぶり、涙とどめあえず、

テアトルに坐して見る、

希望と不安のいりまじる芝居を。

オーケストラはとぎれがちにつぶやく、

天上の楽<sup>ガク</sup>の音を。

道化たちは、高きにいます神の形につくられ、

ほそほそとつぶやき、ひとりごち、

あちこちと走りまわれど——

傀儡<sup>かいらい</sup>にすぎぬ、その行き来は

巨大なる形なきものの命ずるがまま

舞台もたちまち変わる。

そのコンドルめく翼のはばたきのままに

見えざる「悲哀」よ！

そのどたばた劇を——おお

よも忘れまじ！

その「まほろし」をいつまでも追いつく

群集、いつまでも捉え得ず、

ひとめぐりして戻るは

つねに出発点、

おおいなる「狂気」、それにもまさる「罪」と

「恐怖」こそ、このプロットの中心。

だが、見よ、道化の群れに

地を這う形の物の入り来たるを！

舞台の外より

血のように赤き物の、のたうち来たるを。

のたうつ！——のたうつ！——死の苦しみ、

道化たちはその餌食となる。

天使等は人間の血糺ちのりにそんだ  
害虫の毒牙をみて嘔すり泣く。

燈ひが消える—みんな消えた。  
わなないている人々の上に、  
葬式むらさひの幕布どんちゆうが緞帳でんぢやうで  
嵐のようにさっと降りる。  
すれば、天使等は真青に血の気もうせて  
立上り、覆面をとって離める。  
その芝居は「人間」という悲劇で、  
その立役は勝利のうじ虫であると。

天使たちは泣く、悪あくしき牙が  
人の血に血ぬられてゆくがゆえに。

消える！——照明が消える——残らず消える！  
震える形のひとつひとつに  
カーテンが、柩こつがの覆いが、降りる、  
殺到する嵐のように。  
天使たちは蒼然そうぜんとして  
立ちあがり、ヴェールをとりて言う、  
この芝居は「人間」という悲劇、  
その主役は「征服者せいふくしや、蛆」と。

③ボー ドレール 訳<sup>16)</sup>

Voyez! c'est nuit de gala

Depuis ces dernières années désolées!

Une multitude d'anges, ailés, ornés

De voiles, et noyés dans les larmes,

Est assise dans un théâtre, pour voir

Un drame d'espérance et de craintes,

Pendant que l'orchestre soupire par intervalles

La musique des sphères.

Des mimes, faits à l'image du Dieu très-haut,

Marmottent et marmonnent tout bas

Et voltigent de côté et d'autre ;

Pauvres poupées qui vont et viennent

Au commandement des vastes êtres sans forme

Qui transportent la scène çà et là,

Secouant de leurs ailes de condor

L'invisible Malheur!

Ce drame bigarré! oh! à coup sûr,

Il ne sera pas oublié,

Avec son Fantôme éternellement pourchassé

Par une foule qui ne peut pas le saisir,

À travers un cercle qui toujours retourne

Sur lui-même, exactement au même point!

Et beaucoup de Folie, et encore plus de Pêché

Et d'Horreur font l'âme de l'intrigue!

Mais voyez à travers la cohue des mimes,

Une forme rampante fait son entrée!

Une chose rouge de sang qui vient en se tordant

De la partie solitaire de la scène!

Elle se tord! elle se tord! – Avec des angoisses mortelles

④マラルメ 訳<sup>17)</sup>

Le Ver Vainqueur

Voyez! c'est nuit de gala dans ces derniers ans solitaires! Une multitude d'anges en ailes, parée de voiles et noyée de pleurs, siége dans un théâtre, pour voir un spectacle d'espoir et de craintes, tandis que l'orchestre soupire par intervalles la musique des sphères.

//

//

//

Des mimes avec la forme du Dieu d'en haut chuchotent et marmottent bas, et se jettent ici ou là, – pures marionnettes qui vont et viennent au commandement de vastes choses informes, lesquelles transportent la scène de côté et d'autre, secouant de leurs ailes de Condor l'invisible Malheur.

//

//

//

Ce drame bigarré – oh! pour sûr, on ne l'oubliera, avec son Fantôme à jamais pourchassé par une foule qui ne le saisit pas, à travers un cercle qui revient toujours à une seule et même place ; et beaucoup de Folie et plus de Pêché et d'Horreur font l'âme de l'intrigue.

//

//

//

Éteintes! – éteintes sont les lumières, – toutes éteintes! et, par-dessus chaque forme frissonnante, le rideau, drap mortuaire, descend avec un fracas de tempête, et les anges, pallides tous et blêmes, se levant, se dévoilant, affirment que la pièce est la tragédie

Les mimes deviennent sa pâture,  
Et les séraphins sanglotent en voyant les dents du ver  
Mâcher des caillots de sang humain.

Toutes les lumières s'éteignent, – toutes, toutes!  
Et sur chaque forme frissonnante,  
Le rideau, vaste drap mortuaire,  
Descend avec la violence d'une tempête,  
– Et les anges, tous pâles et blêmes,  
Se levant et se dévoilant, affirment  
Que ce drame est une tragédie qui s'appelle l'Homme,  
Et dont le héros est le ver conquérant.

*l'Homme et son héros le Ver Vainqueur.*

//

//

//

Mais voyez, parmi la cohue des mimes, faire intru-  
sion une forme rampante! Quelque chose de rouge  
sang qui sort, en se tordant, de la solitude scénique!  
Se tordant, – se tordant, avec de mortelles angoisses,  
les mimes deviennent sa proie et les séraphins san-  
glotent de ces dents d'un ver imbues de la pourpre  
humaine.

注目すべきことは、マラルメが第4連と第5連を、恐らく意識的に並び替えていることである。文の流れを再検討した結果だろう。この辺りにも推敲に推敲を重ねる癖のあるマラルメの一工夫が伺えるのである。こうした事実は、英語原文と突き合わせて初めて確認できる。

place (anglicisme) や parmi の用法など、マラルメ独自の語法も見られる。

第1連、第2連に見られる抽象名詞を大文字で始めて擬人化する手法は、マラルメの長編詩「プローズ」などへと引き継がれるだろう。

プレオリジナルのうちで重要なもののみを記せば以下のようなになる<sup>18)</sup>。

タイトル

Le Ver Conquérant (*manuscrit avant correction, RL*) このタイトルは当初、ボードレール訳を踏襲していたのだろう。

第3連

lumières — toutes [*biffé*] éteintes toutes! et, sur chaque forme grelottante, le (*manuscrit avant correction*)

第5連

mimes, une forme rampante qui fait intrusion : quelque [*chose biffé*] objet rouge de sang qui se tord hors de la solitude scénique! se tordant — se tordant ; [avec des *biffé*] dans de mortelles angoisses les mimes deviennent sa proie, et les séraphins sanglotent de ces crocs d'un ver [imbus *corrigé 1 en* dégoutant [*sic*] *corrigé 2 en* armés] de la pourpre humaine (*manuscrit avant les corrections qui procurent le texte définitif*)

mimes une figure rampante fait intrusion : une chose rouge sang qui se tord loin des scéniques solitudes! — Elle se tord! — Elle se tord! — Les mimes en de mortelles angoisses deviennent sa pâture, et les anges sanglotent devant les dents de cette vermine marquées de sang humain (*RL*)

この末尾の部分は、マラルメの思考錯誤が窺えて興味深い。マラルメと雖

も、初めは散文的な書きつきだったのが、徐々に語を削り、圧縮されて決定稿が形作られるのがわかる。

「我が母に」(À ma mère)

① To my mother

Because I feel that, in the Heavens above,  
 The angels, whispering to one another,  
 Can find, among their burning terms of love,  
 None so devotional as that of “Mother,”  
 Therefore by that dear name I long have called you —  
 You who are more than mother unto me,  
 And fill my heart of hearts, where Death installed you  
 In setting my Virginia’s spirit free.  
 My mother — my own mother, who died early,  
 Was but the mother of myself ; but you  
 Are mother to the one I loved so dearly,  
 And thus are dearer than the mother I knew  
 By that infinity with which my wife  
 Was dearer to my soul than its soul-life.

②入沢康夫訳<sup>19)</sup>

わが母に

あの高い天国で 互いに囁き合っている天使たちも  
 彼らの燃えるような愛の言葉の中に  
 「母」という言葉ほど深い真心のこもったものは



見出せまいと 私には感じられます故  
 それ故に この懐しい名でずっとあなたをお呼びしてきました——  
 私にとって あなたは母以上の方 私の心を  
 奥の奥まで満たして下さる方です。死は 私のヴァージニアの魂を  
 解き放つと共に 私の心にあなたを住ませたのでした。  
 母上——若くして亡くなった私の実の母上は  
 ただに私自身の母上ですが あなたこそ  
 この私が心をこめて愛した者の母上なのです。  
 なればこそ かつての母上よりもなお限りなく懐しいのです。  
 私の妻が 私の魂にとって みずからのいのちよりも  
 なお限りなく懐しいものでありましたように。

③ボードレール訳<sup>20)</sup>④マラルメ訳<sup>21)</sup>

CETTE TRADUCTION EST DÉDIÉE

À

MARIA CLEMM

À LA MÈRE ENTHOUSIASTE ET DÉVOUÉE

À CELLE POUR QUI LE POÈTE

A ÉCRIT CES VERS

À ma mère

Parce que je sens que, là-haut dans les Cieux,  
 les Anges, quand ils se parlent doucement à l'oreille,  
 Ne trouvent pas, parmi leurs termes brûlants d'amour,  
 D'expression plus fervente que celle de *mère*,  
 Je vous ai dès longtemps justement appelée de ce grand nom,  
 Vous qui êtes plus qu'une mère pour moi  
 Et remplissez le sanctuaire de mon cœur où la Mort vous a installée  
 En affranchissant l'âme de ma Virginia.  
 Ma mère, ma propre mère, qui mourut de bonne heure,  
 N'était que *ma* mère ; à moi ; mais vous,  
 Vous êtes la mère de celle que j'aimais si tendrement,

Parce que je sens que, là-haut, dans les Cieux, les anges  
 l'un à l'autre se parlant bas, ne peuvent, parmi leurs  
termes brûlants d'amour, en trouver un d'une dévotion pareille  
 à celui de « Mère » ; en conséquence, je vous ai dès longtemps  
 de ce nom appelée, vous qui êtes plus qu'une mère pour moi et  
remplissez le cœur de mon cœur, où vous installa la Mort en  
affranchissant l'esprit de ma Virginia. Ma mère, – ma propre  
 mère, qui mourut tôt, n'était que ma mère, à moi ; mais vous  
 êtes la mère de Celle que j'ai si chèrement aimée, et m'êtes  
ainsi plus chère que la mère que j'ai connue, de cet infini dont  
 ma femme était plus chère à mon âme qu'à cette âme via.

Et ainsi vous m'êtes plus chère que la mère que j'ai connue  
 De tout un infini, – juste comme ma femme  
 Était plus chère à mon âme que celle-ci à sa propre essence.

ブレオリジナル<sup>22)</sup>

se [parlant doucement *corrigé en chuchotant bas*], ne peuvent trouver parmi leurs brûlants termes d'amour, aucun d'une (*manuscrit avant les corrections qui procurent le texte définitif*)

où la Mort vous installa en donnant l'esprit de ma Virginie sa liberté. Ma Mère, — ma propre mère, qui mourut de bonne heure, n'était que ma mère moi-même ; mais (*manuscrit avant correction*)

que j'aimais si tendrement ; et ainsi êtes plus (*manuscrit avant correction*)

初期の草稿は、ボードレール訳により近いことがわかる。

ここでも *je vous ai dès longtemps de ce nom appelée* のような過去分詞の殊更の後置、*où vous installa la Mort* のような語順の倒置といった工夫が見られる。

こうして見てくると、マラルメは恐らく先輩詩人ボードレールの翻訳を参照し、部分的にはこれに倣いつつも、これとは異なる独自の世界を形作っていったことが跡付けられよう。とりわけ異なるのは、ボードレールが、恐らくさほど意識的ではない形で、韻文の体裁を温存し、改行していたのに対して、マラルメは意識的に散文訳であることを割り切って考え、改行をしなかった点が挙げられよう。マラルメはこうして、ポーの詩から、その語彙やイメージを借りながら、作詩法の面では主に散文詩や後の「批評詩」へとつながる散文の書き方へとその成果を引き継いでいったのである。

(この稿続く)

## 注

- 1) 拙稿『慶應義塾大学日吉紀要 フランス語フランス文学』、第 57 号、2013 年 9 月、p. 60.
- 2) ポーのテキストは全て以下のサイトから採った。<http://www.eapoe.org/works/>
- 3) 『対訳 ポー詩集』、岩波文庫、1997、pp. 70-77.
- 4) 『ボオ 詩と詩論』、創元推理文庫、1979、pp. 143-146.
- 5) 『ボオ小説全集 I』、創元推理文庫、1974、pp. 346-350.
- 6) 『ポー詩集』、新潮文庫、1956、pp. 50-54.
- 7) 『黄金虫・アッシャー家の崩壊 他九篇』、岩波文庫、2006、pp. 182-186.
- 8) 『エドガー・アラン・ポー短篇集』、ちくま文庫、2007、pp. 169-173.
- 9) Edgar A. Poe, *Œuvres en prose*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 346-347.
- 10) Les Poèmes d'Edgar Poe, Vanier, 1889, pp. 15-19. (以下、マラルメの翻訳は改行もすべてこの版の通りに忠実に再現した。)尚、前稿では Deman 版を採用したが、プレイアード版全集は Vanier 版を決定稿と見なしているので、本稿からこれに従う。
- 11) MALLARMÉ, Stéphane, *Œuvres complètes* (以下、OC と略記), II, Édition présentée, établie et annotée par Bertrand Marchal, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2003, p. 1759. 一部誤りがあるので改変。
- 12) 『ボオ小説全集 I』、創元推理文庫、1974、pp. 290-293.
- 13) 『ボオ 詩と詩論』、創元推理文庫、1979、pp. 147-149.
- 14) 『ポー詩集』、新潮文庫、1956、pp. 55-58.
- 15) 『黄金虫・アッシャー家の崩壊 他九篇』、岩波文庫、2006、pp. 144-147.
- 16) Edgar A. Poe, *op. cit.*, pp. 247-248.
- 17) Vanier, pp. 25-28.
- 18) OC, pp. 1759-1760.
- 19) 『ボオ 詩と詩論』、創元推理文庫、1979、pp. 194-195.
- 20) Edgar A. Poe, *op. cit.*, p. 1.
- 21) Vanier, p. 117.
- 22) OC, p. 1769.

〔前項訂正〕

同紀要 57 号、p. 33 本文 2 行目 補足 → 捕捉